

Living the Lotus 8

Buddhism in Everyday Life

2026
VOL. 251



**7月1日から2週間、インド各地の教会で「先祖供養ウィーク」
15日には感謝の心で「盂蘭盆会」式典を開催**

**Living the Lotus
Vol. 251 (August 2026)**

【発行】 立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp
編集責任者: 前田 貴史
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼協祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生かし、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

人のために火をともしれば

庭野日鑛
立正佼成会会長



学林生が耕す青梅練成道場の田んぼでの「田植え際」に参加（今年6月）

「人のため」は、だれのため？

私たちは、人と人がお互いに支えあって生きているというご縁の有り難さを、ふだんから何げなく口にしています。「困ったときはお互いさま」とか「旅は道連れ、世は情け」といった成句も、日本では昔から当たり前の感覚をともなって受けとめられている言葉です。

いま「日本では」と申しましたが、たとえばアフリカのガーナ共和国では、多くの人の心に「どれほど困窮しても、けっして野垂れ死ぬことはない」という考えが根づいているそうです。だれかが必ず支えてくれる、助けてくれる。そのことをお互いに信じているから、いつでも明るく前向きに暮らすことができる——それを「ガーナマジック」というのだそうです。もちろん世界じゅうのどこにも、こうした人間同士の支えあいを前提とした価値観やならわしなどの文化と、それらを表現した言葉があると思います。

同様の意味で、「情けは人のためならず」も日本ではなじみ深い諺です。これはいうまでもなく、人への思いやりはめぐりめぐって自分のためになるという意味で、「この世は持ちつ持たれつの世界」であることをあらわしています。

また、布施の意義と功德をわかりやすく伝える「人に物をほどこせば我身のたすけとなる。譬へば、人のために火をともしれば、我がまへあきらかなるがごとし」という日蓮聖人のお言葉も、「情けは人のためならず」に通じるお諭しですが、この「人のため」という気持ちや行動に、最近は疑問や違和感をもつ人がいると聞きます。「人のため」を自己犠牲ととらえ、それを美德としたり他人のために時間を使ったりするのはいやだと思ふ人が少なからずいるのです。



そのような現代において、人間の生活の大前提ともいえる「持ちつ持たれつ」や「お互いさま」の精神がなんの違和感もなくそこかしこで発揮され、だれもが人にやさしくて、暮らしやすい社会はどうすれば保てるのでしょうか。

南無ボランティア菩薩

この夏休みを利用して、自分の時間をまさに人さまのために使い、ボランティア活動を行なう人もいると思います。

ボランティアは、「思いやりの気持ちから、自発的に困っている人に奉仕する人」という意味ですが、奉仕には神仏に仕えるとの意味もあります。昨年、発災から三十年を迎えた阪神・淡路大震災ほか東日本大震災や熊本地震などの被災地にうかがった際、被災した方々の力になろうと、あたかも神仏に仕え、尊い命に仕えるような姿勢で懸命に立ち働くボランティアのみなさんを拝見して、私は心から「この方たちこそ菩薩に違いない」と胸打たれたものです。そうした「ボランティア菩薩」に接するたび、人には「自分だけでなく、みんなといっしょに幸せになりたい」と願う気持ちがあることを私は教えていただくのです。

一方、人のためという考えが受け入れられない人には、いくら「この世は持ちつ持たれつですよ」とお伝えしても、逆効果のような気がします。考え方は人それぞれなので、価値観の押しつけはかえって心を遠ざけると思うのです。

ただ、心は十界互具といえますから、だれにも仏や菩薩の心が具わっていて、みな世の中をよくしていきたいと願う気持ちをもっています。それを信じて自らが人さまのために身や心を使っていると、たとえ言葉では伝わらない相手にも、その後ろ姿が、人のためを思って尽くせる喜びと「この世は持ちつ持たれつ」という真実を伝えてくれるはずです。そうした姿勢をとおして、「人を思いやる文化」を一人ひとりが身をもって伝承していくことが大事なのです。

世界を見渡しても、だれもが暮らしやすいとはいえない現状があります。みんなが和になって生きるための身近な実践については、また次号でもふれてみたいと思います。

(『佼成』2026年8月号)



出会いを大切にして、多くの方を教えに導き、幸せに

モンゴル・ウランバートル支部 バヤンジャブ・オユンゲレル

立正佼成会に入会したのは、いつごろ、どんなきっかけだったのですか？

私は2015年に長女の嫁ぎ先のお姑さんに導かれて、立正佼成会に入会させていただき、今とても感謝しています。

「日本の仏教団体……」という言葉を目にした瞬間、2007年に夫が日本の病院で脳腫瘍の手術を受けた時のことが脳裏に浮かびました。夫は手術のあと身体に麻痺が残りましたが、現在は体調もよく、とても元気になっています。その時から日本という国と日本人をとて身近に感じるようになりました。こうした背景もあり、私はありがたく入会させていただきました。

入会后、仏さまの教えによって心の持ち方を転換された体験があれば教えてください。

立正佼成会の法座は、仏さまの教えに基づいて生き方を学び合う場であり、私が心を転換できた場だと受け止めています。私は入会する前、心の中

の悩みを表には出さず、自分一人で頑張っていました。初めて法座に座った時、私はサンガの皆さんが自分の悩みを包み隠さず、ありのままに打ち明ける姿を目の当たりにして本当に胸が熱くなりました。入会当時、私は夫の介助や日常生活のサポートに心を込めて取り組み、心身ともにかなり疲弊していた時でした。

《これは私の思いだから人に話しても仕方がない……これも私の人生だから……》と自我が強く、負けず嫌いの私は自分の気持ちを誰にも相談できずに一人で抱え込んでいました。でも、法座で法座主の幹部さんやサンガの皆さんが「今までつらかったね」「よく一人でがんばってきたね」と私に優しく寄り添い、励ましてくださったことで、私のそれまでの頑なな心がやわらぎ、胸の内を素直に吐き出すことができたのです。このように私はありのままを話し、ものごとを前向きに考えられるようになり、心は穏やかになりました。

法座が大きな人生の転機になったわけですね。

法座で会員さんたちのお話を聞くうちに《私は介助が必要な夫を心配するあまり、夫のやろうとする意欲をわからずにいた……夫のために何でもやってあげようとする私の間違った関わり方は、夫を不快な思いにさせていたのだ》と深く反省することができました。

それ以来、私は夫の意思を尊重して、できることは本人に任せ、できないことだけをサポートすることにしました。日常の動作の必要などところだけを支え、生活そのものが夫のリハビリにつながるように努めました。そのように教えによって心を切り替え、私自身の考えや態度を変えたことで夫との関係もよくなっていきました。今では時々、家事を手伝う夫の姿を見ると自信と喜びに満ちており、何より私が立正佼成会で修行することを応援してくれるようになりました。



ウランバートル支部発足22周年式典で説法をするオユンゲレルさん

Interview

仏さまの教えを学び、心に留めているものはありますか？

日常生活において私がいちばん身近に感じているのは「すべてのものは、お互いに関係し合っている」という縁起の教えです。また、すべてが関係によって成り立っているからこそ、「あらゆる存在は、それ自体で独立して存在するものはない」という諸法無我の教えにも関心を持っています。モンゴルには「一人では家族にならない、一本の木では火は燃え続けられない」という有名なことわざがあります。このことわざには、モンゴルの厳しい自然環境や遊牧生活において家族や仲間の協力や団結が不可欠であることが示されており、同時に関係性や相互依存など縁起や諸法無我の教えと共通点があることに気づきました。「人間は多くの人や社会との関係の中で生きている」「たくさんの薪があってこそ火は燃え続ける」——こうした見方はまさに縁起や諸法無我の教えそのものだと思います。そして、私たちはあらためて自分一人で生きているのではなく、家族や周囲の人とのつながりや関係の中でお互いに助け合い、支え合いながら生か



降誕会団参のため来日中、4月4日に南多摩教会で行なわれた「入卒部式(この春入学・卒業を迎えた子どもたちをお祝いする会)＆お花見」に参加するオユンゲレルさん(左から2人目)



降誕会団参で来日中、ウランバートル支部の皆さんと国際伝道部の事務所を訪問(中列右から3人目)

されていることを認識させていただきました。

立正佼成会のどんなところに魅力を感じていますか？

立正佼成会のご供養は、ご先祖さまから受け継がれてきたいのちの尊さに気づく大切な実践だと思っています。私は朝夕、法華經の經典でご供養をするたびに何とも言えない清々しい気持ちになり、いつも仏さまとご先祖さまに感謝させていただいています。モンゴルでは伝統的にチベット仏教を信仰する人が多く、私も以前はお寺に参拝して、僧侶のお経や仏教の解説を聞くことができましたが、すべてチベット語なのでまったく理解できませんでした。でも、立正佼成会では母国語のモンゴル語の經典でご供養ができることが魅力的で、毎日仏さまの教えを身近に感じ、その内容もよくわかるので本当に有り難いと思っています。今では、お経を上げるのが大好きになり、おかげさまでモンゴル語版の『法華三部經』も読誦させていただくようになりました。また、毎月の会長法話を心から有り難く読ませていただいております。

最後に今、願っていること、これからの修行目標を聞かせてください。

私はこれまで立正佼成会の教えに出遇えた感謝の気持ちから、親戚と友人6人をお導きさせていただきました。

その一人である、義理の妹エレデネチマグは努力家で、仏性が輝いている人で、教師資格もいた

できました。2024年の秋、私は義妹と一緒に国際伝道部の鈴木次長さんからご本尊を拝受し、それぞれの家庭に勧請させていただきました。これからも一つひとつの出会いを大切に、一人でも多くの方をこの尊い教えにお導きして、幸せになっていただきたい——それが私の今のいちばんの願いであり、修行の目標です。そして、法華經の教えによって一人ひとりが本来そなえている尊い仏性に気づき、自分のいのちをもっと輝かせていただきたいと思っています。

それも立正佼成会や仏さまの教えを家庭で実

践させていただいた信仰の証しだと受け止め、心から感謝しています。今年、息子サンチルと二人の孫と一緒に「降誕会団参」に参加して大聖堂を参拝し、仏さまの教えを学ぶことができ本当に嬉しいです。これからも立正佼成会で学んだことを行ないで示し、子どもたちや孫たちに信仰が継承されることを願いながら、日々精進していきたいと思っています。

最後に、モンゴル・ウランバートル支部のゾリグマー支部長さんをはじめ、幹部さん、会員みなさんに感謝をお伝えさせていただきます。



ウランバートル支部発足22周年式典に講師として参加した出射優行さん（元教団役職者）と——左からサンチルさん、お孫さん、出射講師さん、オユンゲレルさん



法華經と四諦の法門

ドミニク・スカランジェロ
立正佼成会国際アドバイザー



法華經の如来神力品に示される「即是道場」は、私たちが家庭や職場、学校など、日常生活のあらゆる場所を修行の場として教えを実践できるよう、そっと背中を押してくれる教えです。

「苦諦」——願いと現実との隔たり

今月から皆さんと一緒に「四諦の法門」について学んでいきたいと思います。仏教についてお話をするときは、四諦の法門から始めるのが普通ですが、私たちは法華經の観点からこの法門を理解するため、今までこのテーマを扱ってきませんでした。

悟りを開かれたお釈迦さまが初めて説法をされたとき（初転法輪）、最初に説かれたのが四諦の教えであったと伝えられています。四諦は、医師による患者の病気の診断と治療法によく例えられます。四諦の一つ目（苦諦）は、人間の精神的な病、すなわち苦を診断するものです。仏さまは、私たち衆生の人生は苦に満ちていると説かれました。しかし、この苦とは何なのでしょう？

「苦」という言葉を聞くと、私たちは激しい苦悩や病氣、身体的・精神的な苦痛を思い浮かべます。經典の中にも「生・老・病・死」の四苦が説かれている箇所が多くあります。しかし、もし苦が四苦だけを意味するのであれば、多くの人々は「苦の多くは人生の終盤に訪れるもの」と考え、「人生は苦に満ちている」という仏さまの言葉に疑問を感じるかもしれません。

しかし、日常生活に当てはめて考えてみると、「生・老・病・死」には別な意味があることがわかります。私たちは「これは良い」「これは悪い」「これは望ましい」「これは望ましくない」などと、日々自分のものさしで物事を判断しながら生きています。そういう身勝手な差別心があるために、私たちには不満や怒り、悲しみや失望など、さまざまな苦しみが生れます。「生」とは、このように苦がつぎつぎに生まれてくる状態をいうのです（『法華經の新しい解釈』199頁）。そして、「老、病、死」はそうした苦との闘い、つまり自分たちが望んでいるさまざまな物事や状況が変化し、古くなり、壊れ、しまいには失われていく時に感じる苦悩や不安なのだと考えることができます。このような観点から見れば、多くの人が

「人生は苦に満ちている」という仏さまの教えに納得できるのではないのでしょうか。私たちは生涯を通じて、何度も「生・老・病・死」という一連の出来事を経験しているのです。そう考えると、まさに「人生は苦に満ちている」のです。

この説明はまた、パーリ語でドゥッカ (dukkha) と表記される苦の本質的な意味も明らかにしています。会長先生は、「苦は物事が自分の思い通りにならないところに生じる」と教えてくださっています。つまり、仏さまが「人生は苦に満ちている」と説かれたのは、「現実とは往々にして私たちの願い通りにはならない」という意味なのです。私たちの願いと現実との間に生じる隔たり、その中で感じる心の動きこそが苦であり、だからこそ仏さまは、「愛するものと別れること」「嫌なものから逃れられないこと」「欲しいものを得られないこと」が苦しみであるとも説かれたのです。これらはいずれも、物事が自分の思い通りにならないことのごく身近な例なのです。

仏さまは、より幸せで充実した人生を生きるためには、まず「人生は苦に満ちている」という事実を認め、そして苦が生じたときには、それを苦として正しく認識することが必要と説いておられます。意外に思われるかも



しませんが、私たちは自分自身が苦しんでいることに気づかないことがよくあります。仏さまは、人は苦の中にいるにもかかわらず、往々にしてそれを快樂と勘違いしていると洞察されました。苦と快樂を混同した結果、私たちは、さらに大きな悲しみや苦痛をもたらす思考や行動のパターンを繰り返しています。ですから、「苦諦」の実践とは、人生が苦に満ちていることを生きた実感として受け止め、日常生活の中で苦が現れたとき、それを正しく認識することなのです。

では、どうすれば自分の苦にもっと気づけるようになるのでしょうか。その一つの方法は、「物事が思い通りにならなかったときの自分の心の状態」に注意を向けることです。そのようなとき、すぐには気づかなくても、私たちは心の奥で不安や苦悩を感じていることが多いのです。もう一つの手がかりは、「六道」の心の状態、とりわけ「四悪趣(地獄・餓鬼・畜生・修羅)」の心が現れたときです。

私たちの心に瞋恚、貪欲、愚痴、嫉妬が生じるのは、こうあってほしいと願う世界の姿と現実との隔たりに不満や憤りを感じるからです。人が言うことを聞いてくれないときや、物事が思い通りにならないとき、私たちは「瞋恚」の心を起して腹を立てたり、人を恨んだりします。欲しいものが得られないとき、私たちの心には「貪欲」が姿を現します。洞察力や判断力が欠けているとき、私たちの心は「愚痴」の状態にあるといえます。そし

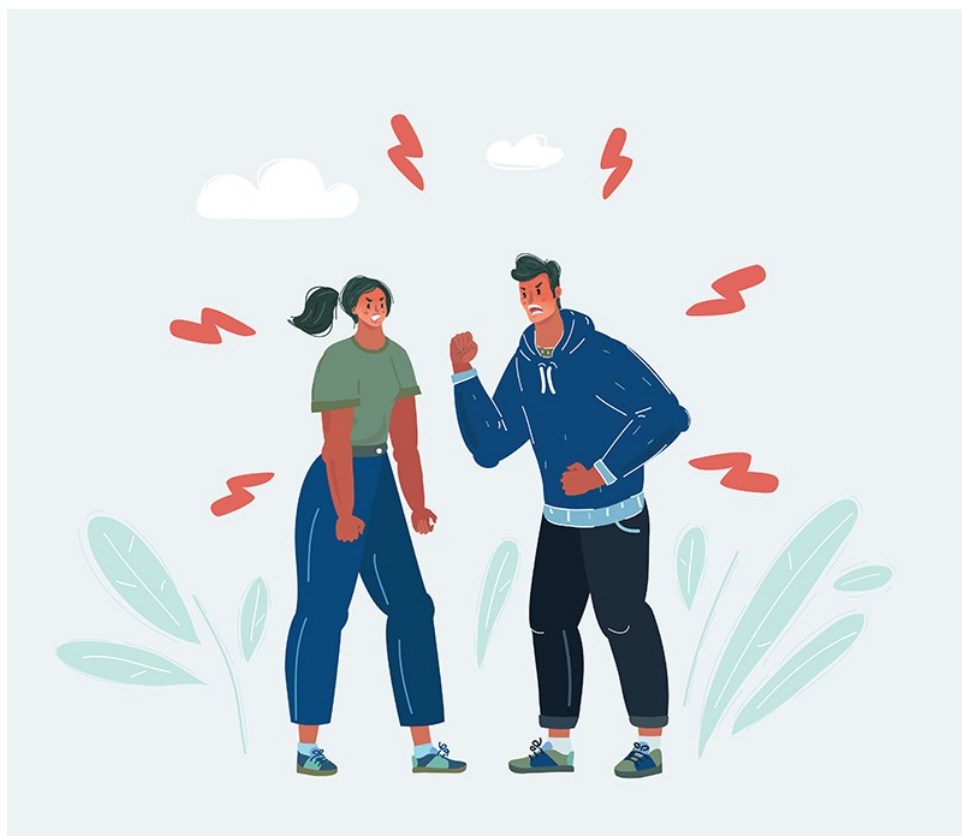
て、他の人が自分よりも多くの望みを叶えているように見えるとき、私たちは「嫉妬」にかられるのです。結局のところ、これらはすべて、私たちが「物事が思い通りにならない」ときに経験する苦のさまざまな姿なのです。

しかし、私たちがこうした心の状態を最初から苦と感じるかといえば、そうとは限りません。たとえば、自分の思い通りにしてくれなかった相手に怒りをぶつけたとき、一瞬だけ満足感を覚えることがあります。このように、悟りに達していない私たちの心は、苦を一時的な快樂であるかのように錯覚してしまうことがあるのです。

だからこそ、こうした心の状態が現れたときには、たとえそれを苦しみを感じてはいなくても、「今、自分は願いと現実との隔たりによる苦を経験しているのだ」と気づくことが大切なのです。

最後に、私たちの身体もまた、苦について重要な手がかりを与えてくれます。「十如是」を学んだ際、「如是体」とは私たちの心身の全体、すなわち心と身体が一体となった存在を指すことを学びました。たとえ意識の上では苦に気づいていなくても、苦は身体の生理的な変化となって現れることがあるのです。

マインドフルネス(意識を「今・ここ」に向けること)とボディフルネス(全身の気づき)を実践することによって、私たちは「願いと現実との隔たりによる苦」に気づき、「苦諦」を実践することができるのです。





サンガの現場レポート

スリランカ教会/バングラデシュ教会 教会長 赤川 恵一

苦を乗り越えた親子の絆

今月の「即是道場」では、四諦の法門の「苦諦」について学びを進めております。み教えには、「苦しみは、物事が自分の思い通りにならないところに生じる」とあります。私たちは、現実と願いが大きくかけ離れたとき、心に深い苦悩を抱えます。先日、バングラデシュ教会を訪れたあるご夫婦との出会いは、まさにこの「苦諦」の本質と、苦から立ち上がる人間の尊さを、私に深く教えてくれるものでした。

銀行に勤める一人息子を持つそのご夫婦は、ある日、沈痛な面持ちで私の前に座られました。「最近、息子が突然口をきかなくなり、私たちを避けているようではないのです」という切実な訴えでした。詳しくお話を伺ううち、息子さんが置かれた過酷な現実が浮かび上がってきました。優秀な彼が上げた素晴らしい預金獲得の実績を、彼の能力に嫉妬したムスリムの女性上司に丸ごと奪われ、上司の実績にすり替えられてしまったということです。周囲の幹部もほぼムスリムで占められる中、どれほど上司の不正を訴えても話を聞いてもらえず、上司が咎められることもありませんでした。マイノリティとして社会で生きる逆境と絶望の淵で、彼は一人、心を閉ざしていたのです。

「なぜ、正しい者が不利益を被るのか。」この思い通りにならない余りにも理不尽な現実には、彼にとって耐え難い「苦」そのものでした。そして彼のご両親もまた、苦しむ息子の姿に大きな不安を覚え、そのことが家庭内に暗い影を落としていたのです。

私は、不正への怒りや社会への憤りをご両親と一緒に並べたてて代わりに、息子さんの心の痛みにしずかに思いを馳せました。そして、目の前のご両親にこう言葉を掛けさせていただきました。「息子さんはご両親に心配をかけまいと、一人で苦しみを抱え込んでこられたのですね。本当にご両親思いの、優しい息子さんですね。」

その瞬間、お母さまの目から大粒の涙がぼろぼろとこぼれました。社会の不正を裁く言葉ではなく、息子さんの傷ついた心に寄り添う一言が、それまでご両親の胸を締め付けていた「つかえ」を、温かく溶かしたようでした。

その後、嬉しい知らせが届きました。心の荷を下ろした息子さんは、親族の力を借りながら、新たな職場を求めて前向きに就職活動を始められたということです。怒りや絶望という「四悪趣(地獄、餓鬼、畜生、修羅)」の迷界に囚われ続けることなく、彼は現実を受け止め、次の新たな一歩を踏み出しました。それは、ご両親の深い愛と、息子さんの優しさが織りなす「親子の絆」という、何にも勝る光があったからにほかなりません。

思うようにならない現実と直面したときこそ、私たちは本当の優しさと強さに出会うことができます。これからもこの尊い絆で結ばれた親子を力強く応援し、地域の皆さまとともに、苦しみを乗り越える智慧を分かち合っていきたいと念じております。



慈悲心から生まれる厳しさ

羅睺羅を戒めたお釈迦さま

立正佼成会開祖 庭野日敬



日本武道館で開催された全国戦没者追悼式にて(1989年8月15日)

そこで思い出すのは、「嚴愛の二法」ということです。人を育て、人を指導するには、厳しさとやさしさを兼ねそなえなければならないというセオリーです。

お釈迦さまは、その典型であられました。底にはかぎりない大慈悲を秘めておられるのですが、実際のご指導には厳しい面も大いにあったのです。こんなことがありました。

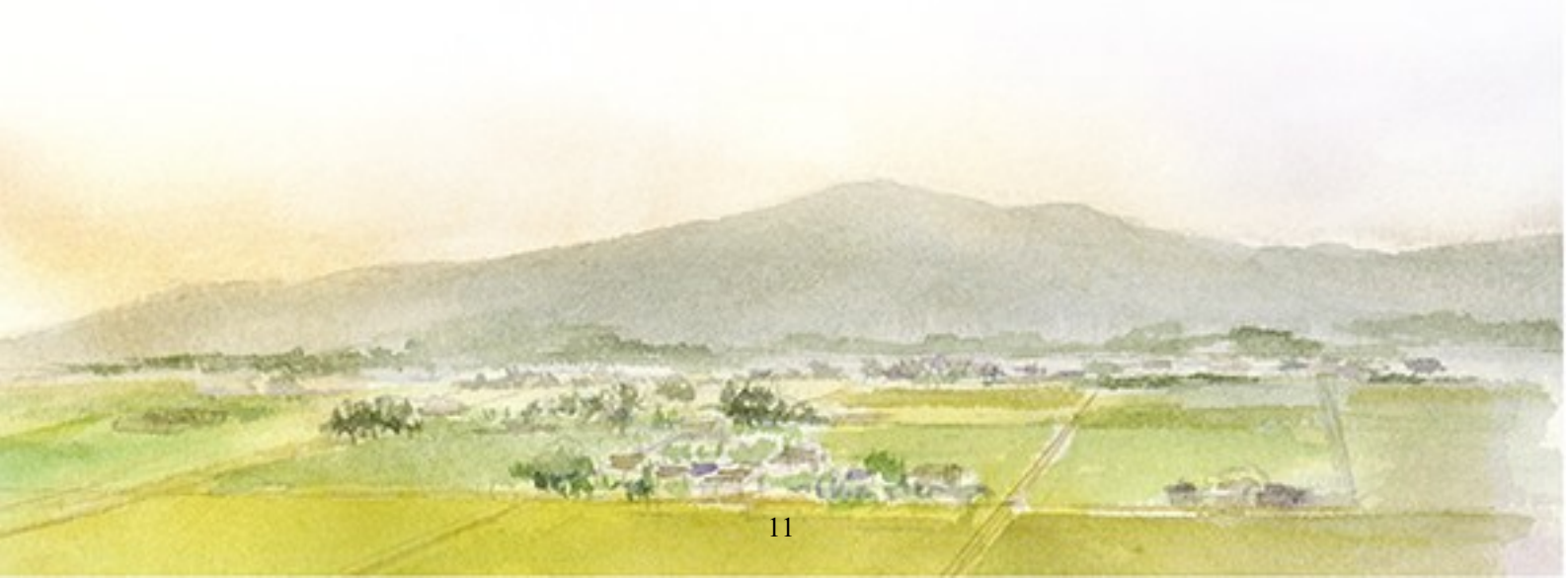
実子でもあり、弟子でもあった羅睺羅が、少年のころのことです。羅睺羅は、王舎城外の温泉精舎で修行していました。在家の人たちがお釈迦さまにお目にかかろうとして、「世尊はいま、どこにおられますか」と尋ねることがあります。すると、羅睺羅はいたずら心から、お釈迦さまが靈鷲山におられるときは「竹林精舎におられます」と答え、竹林精舎にいらっしゃるときは「靈鷲山にいらっしゃるようです」と答えるのです。二つの場所は八キロほども離れているので、人びとはむだ足を踏んで疲れ切り、お釈迦さまにお目にかかれずじまいになってしまうのでした。

そのことを聞かれたお釈迦さまは、温泉精舎に出向かれました。そして、羅睺羅に「たらいに水を汲んでくるように」と命じました。そして、たらいで足を洗われてから、「羅睺羅よ。そなたはこの水を飲むことができるだろうか」と尋ねます。羅睺羅が「足を洗った水は飲めません」と答えると、「そうであろう。元は清らかだった水でも、こうなったら飲めない。出家して清い道を歩みながら、道を励まず、心を治めるどころかうそをついて人を困らせ、それを喜ぶいまのそなたは、この水のようなものだよ」と諭されました。

そして、その水を捨てさせ、「このたらいに、飲食を盛ることができるだろうか」と尋ねました。「いいえ。不浄の水の入っていたものですから、できません」「そうであろう。いまのそなたも、このたらいのような状態なのだよ」といわれ、今度は足でたらいを蹴られました。たらいはゴロゴロと転がり、何度も跳ね上がって止まりました。

お釈迦さまは「そなたはいま、このたらいが壊れはしないかと心配しただろうか」と聞かれます。「いいえ。安物ですから壊れても困りません」と答えますと「そなたも、いまのように言葉をもてあそんで人を悩ますならば、人びとに愛されることもなく、惜しまれることもない人間になるのだよ」と戒められました。

羅睺羅はこの厳しい訓戒が身にしみて、その後、生まれ変わったように修行に励み、隠れたところで「徳」を積んで、「密行第一」というお墨付きをもらって十大弟子の一人となったのです。



あの日の涙が教えてくれたこと

国際伝道部長
前田 貴史

皆さん、こんにちは。私が信仰を持つきっかけとなったのは、高校二年生の夏休みに参加したボランティア活動です。校成会のサンガの皆さんとともに、戦争でご主人と右足を失われたご婦人のお宅を訪ね、台所の棚を作るお手伝いをしました。

作業を終えて帰ろうとした時のことです。その方は松葉杖をつきながら、わざわざ外まで見送りに来てくださいました。私たちが「ありがとうございました」とお礼を言い、自転車をこぎ出した瞬間、後ろで「バタッ」という音がしたのです。

振り返ると、ご婦人は地面に座り込み、涙を流しながら私たちに手を振っておられたのです。

高校生だった私は、その姿に大きな衝撃を受けました。自分たちのささやかな行ないが、これほどまでに人の喜びにつながることを知り、深く心を動かされました。その時の光景は今も忘れることができず、私の信仰の原点であり、活動を続ける原動力となっています。

会長先生は今月のご法話の中で、「人には『自分だけでなく、みんなといっしょに幸せになりたい』と願う気持ちがある」と教えてくださっています。人のためにともした火は、相手の心を照らすだけでなく、自分自身の心も温めてくれます。

布施やボランティアはもちろん、親切な言葉や小さな気遣いも、その灯火の一つです。

私たちが菩薩の心を大切にしながら、身近な人のために小さな火をともしていきたいものです。その積み重ねが、人を幸せにし、自分自身の喜びにもつながっていくのだと思います。



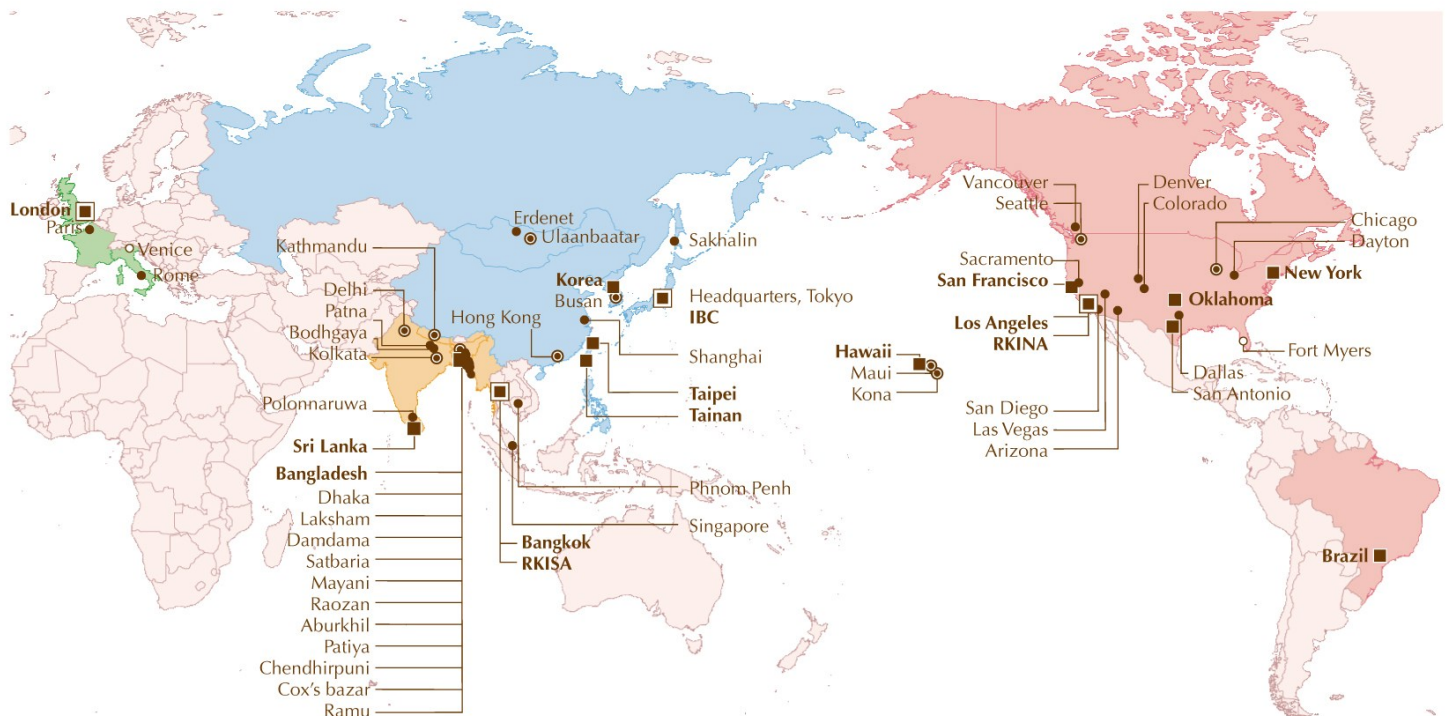
6月1日、ロンドン法座会員のフィリップス洋子さん(前列左)を国際伝道部のオフィスにお迎えして(前列中央が前田部長)

Rissho Kosei-kai International

Make Every Encounter Matter



🌸 A Global Buddhist Movement 🌸



Information about
local Dharma centers



facebook



X



✉ We welcome comments on our newsletter Living the Lotus: living.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp